



TITLE:

橋本庄内の經濟思想

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 橋本庄内の經濟思想. 經濟論叢 1940, 51(3): 363-371

ISSUE DATE:

1940-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/131435>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十五卷第三號

昭和十五年九月

論叢

スミスとリスト

經濟學博士

堀

經

夫

經濟變動と財政

經濟學博士

沙

見

三

郎

時論

經濟に於ける統制と體制

文學博士

高

田

保

馬

研究

元史食貨志に見はれたる貨幣思想

經濟學士

穗

積

文

雄

統制組織と問屋金融

經濟學士

田

杉

競

造

原始教團の共同性

經濟學士

澤

崎

堅

造

說苑

橋本左内の經濟思想

經濟學博士

本

庄

榮

治

滿洲大豆の發展

經濟學士

江

頭

恒

治

附錄

彙報

外國雜誌論題

説苑

橋本左内の經濟思想

本庄榮治郎

一 序 言

橋本左内はいふまでもなく幕末の志士であり、幕府繼嗣問題に關する所謂安政の大獄に連座して、遂に安政六年十月七日死罪となり、廿六歳を一期として此世を去つたことは、人の周く知る所である。且彼が當時日露同盟論を提唱したことも、あまりに有名な事柄である。然し左内の政治經濟思想一般については書き記されたものもないやうであるから、以下少しくそれを記して見たいと思ふ。據る所は、すべて「橋本左内全集」に收められてゐる。

二 略 傳

橋本左内の經濟思想

橋本左内、名は綱紀、字は伯綱、景岳又は藜園と號した。天保五年三月十一日越前福井に生る。世々藩醫であつた。七歳にして漢籍詩文及書を學び、十歳にして三國誌を通讀したといふ。吉田東篁に經史を學びしは十二歳のときである。十五歳にして既に「啓發錄」を著はしてゐる。嘉永二年秋十六歳大阪に赴き緒方洪庵につき蘭學及西洋醫術を修め、同五年父の歿後、醫療に従ひ且醫員に列せらる。安政元年江戸遊學を命ぜられて出府し、杉田成卿の門に入つて醫術及蘭學兵學を究む。上府以來の知友に藤田東湖・佐久間象山・藤森弘庵・林鶴梁・芳野金陵・羽倉用九・安井息軒等の諸名士があり、經國濟民を志とするに至つたといふ。二年七月命により國に歸り、十月醫員を免ぜられて御書院番となり、身を國事に委ぬ。其冬再び江戸の藩邸に遊學し、十二月西鄉隆盛と交る。藩新に明道館を興すや(二年三月)、三年九月其幹事となり翌年學監に補せらる。會で鷹巢山城趾より石炭を携へ歸りて試験せしことあり、また諸書を參考して電氣を發し電信を

作つたといふ。四年四月建議して洋書習學所・武藝所を設け、藩士に兵法物産算術等の新知識を教授するの途を開き、或は劍槍鐵砲の術を講究せしむる等、教學上に功績少くなかつた。八月三たび江戸に召されて藩主松平慶永の侍讀となり、兼ねて樞機に參與す。爾後主として幕府繼嗣のこと及び外交の事に盡瘁し志士と交る。武田耕雲齋曰く『東湖死して又東湖あり』と蓋し左内の人物を知るべきである。明治十一年祭筵料を賜ひ、二十二年靖國神社に合祀せられ、二十四年四月八日正四位を追贈せられた。

三 政治經濟思想

(1) 國家の大計 嘉永六年ベリール來航以後國の内外的狀態は頗る切迫し所謂非常時であつた。この際左内が『第一君德之輔養・第二士氣之維持・第三學校之施設・第四兵制之規律・第五貨財之量制』を擧げ『此五者は國家の大計、運祚之命脈』なりと論じてゐることとは時局當然のことであるが、軍備の充實ばかりでな

く學校之施設を重視してゐることは、先づ第一に注意すべきことである。

安政四年十月米國總領事ハリスは江戸に出府して所謂重大事件の陳述をなした。これより彼我の關係は更に一進の機に臨んだものである。左内は安政五年一月十四日の川路聖謨に對する應答書の中に『昨年に到候ては墨使も登營に相成候位、夷蠻の情狀殆んど一變、就ては本朝も此迄の御體制にては雖濟』とし『寡君存にては、外向何分西洋の如く航海通商を専らにし、法律嚴整に取調、富饒の基を開、物産を起し、技藝を勵し、器械を研製し、兵制も大概彼に倣ひ被申度候得共御國內の御大體は何地迄も宗祖の御舊制を概括して、建國の御大體を基礎と被致度御見込に候』と述べてゐるが、之はもとより左内の意見と見るも差支なきものであり、開國貿易と物産興隆とを説いてゐることは第二に注意すべき點であらう。

かゝる非常時局に當つて『狐狸狗鼠之輩橫議暴行仕候て不憚』は政府に眞の人材を得ざるためなりとし、

1) 安政三年四月二十六日左内より中根靱負に宛てたる書翰(全集、III頁)
2) 全集、44頁。

教育の必要を認め、學制に關する意見を建議してゐる。既に述べた如く左内は安政四年四月洋書習學所・武藝所を設くべきことを建議したが、安政四年閏五月十五日の學制に關する意見に於ては、人材を得るには四箇の要件ありとし、それは第一には材を知るの道、即ちその人の長する所を知りその短所を看破すること、第二に材を養ふの道、既にその材を知らば之を生育長養してその志を遂るを得せしむること、第三に材を成すの道、藝を教へ學を殖へ、それを正道に誘き、實事に試み、遂にその材を練熟して有用の者とならしむること、第四に材を取るの道、材既に用に堪ふるに至らばこれを朝に薦めて其堪ふべき處の任に當らしむべきことこれである。この四道のうち、知材・成材の二道を盡すは最も難事なりと説いてゐる。『口にこそ治國の、平天下のと申居候得共、其腹は本來無一物にて、事業作用の上に施行候様之確見等は無之』或は『大言抗論、盡く空理に陥り、聞くべくして行ひ難き事のみ申居候』如き輩を以てしてはこの時局を乗切することは

橋本左内の經濟思想

到底不可能である。『時弊を矯め、政教一致、文武不岐の實行を期する』ためには人材を知り之を養成し之を任用するの外はない³⁾。かくの如く人材を得るの要を痛論したことは第三に注意すべき點であらう。

以上述ぶる所によつて見るに、左内は一方には開國貿易、他方には教學の刷新を説き、舊套を捨て、新體制に基く内外施政の必要を認めたものといふことが出來やう。

(□) 採長補短の思想

安政二、三年頃に記せる左

内の『西洋事情書』の中には『近來西洋各國専ら政教を修め、人民を撫育し其法度紀律整肅懇到中々一方ならず。(中略)一事にても新發明の事有之候へば、其を學校へ下し、其是非利害を糾し、定論相立候上にて、或は之を書に著し、或は之を製作して唯其國のみならず、遠く他邦へ迄驚ぎ人を利、己を利候様心掛候事、西洋各國之風習に有之候由』と説き、また五年二月三條内府に上れる書面の中にも

『彼の國風、皇國並に漢土邦とは大に相違仕、元來我一國に

3) 學制に關する意見劉子(全集、26—36頁)
4) 全集、5—6頁。

て事給物足と申譯には不參、鑛山多き國は専ら採掘を事とし之を各器什に製作して諸方へ鬻ぎ、材木に富む國は木器、毛獸に富む國は職工、平原曠野は植藝を務、沿海島嶼は漁獵を業として、皆各相互に交換貿易して生涯を送り候様に相見へ申候。依之自國の物を自國にて賣候へば利益も不夥。且右様の國柄故、自ら有餘不足の者も御座候に付、遂に他邦他洲へ齎駕候事とは相成申候⁵⁾。

とて各國有無相通する所以を説いてゐるが、これより一步を進めて彼の長を採つて我が短を補ふべき思想も屢あらはれてゐる。例へば安政二三年頃の「外國貿易説」の中にも、品物の交易のみならず「智慧の交易肝要に御座候」と喝破し「彼之情を得、彼之長を習ひ、之を御國內に推廣め候はゞ、其利制産のみならずと奉存候⁶⁾」といひ、更に安政四年四月學問所設置布令原案には

『近世西洋大に學術技藝を研究、殊に數十年戰爭止まざりしにより兵科を始器械を製し物産を開き候事、及度學算術等に至るまで、頗る實驗を盡し且其精巧を極め、問々皇國と雖未だ及ばざる所を發明仕候故、彼之長伎を取て吾皇國の利器を御補足被成、皇國をして益諸邦に勝れ候様に被成度御趣意と奉存候』云々

と説き、當今海警頻に到るの時節にあつては『尊王攘夷之策、先彼の所長を知り候事第一たるべく候』と斷じ、彼の長する所を知らんがためには『其學藝技術を講究仕候事最も急務』であらう。これ即ち洋書習學所設立の理由であるが、徒らに『新奇便用を喜び、外國を夸稱して皇國を卑視致し候様の所行無之様心得爲仕度奉存候事』と警めてゐる。

(ハ)日露同盟論 安政四年十一月二十八日左内より村田巳三郎(氏壽)に宛てたる書面に曰く、⁸⁾

『當今之勢、日本之事務、國內の御處置と、外蕃御待遇との二件に可歸奉存候。外蕃御待遇に付ては、海外の事情第一御推察有之度候。方今の勢は、行々は五大洲一圖に同盟國に相成、盟主相立候て、四方の干戈相休可申相運候はんと奉存候。右盟主は先英魯の内に可有之候。英は慷慨貪欲、魯は沈鸞嚴整、何れ後には魯へ人望可歸奉存候』

とて英露の二國を兩雄と觀、日本は之れに對して如何なる策をとるべきかについては、

『偕日本は逆も獨立難相叶候。獨立に致候には山丹滿洲之邊朝鮮國を併せ、且、亞墨利加洲或は印度地内に領を不持しては、逆も望の如ならず候。此は當今は甚六ヶ敷候。其譯は印

5) 全集、377頁。
6) 全集、4頁。
7) 全集、17頁。
8) 全集、301—302頁。

度は西洋に被領、山丹邊は魯國にて手を附掛居候。其上今は力不足、迨も、西洋諸國の兵に敵對して比年連戦は無覺東候間、却て今の内に同盟國に相成可然候」

と説き、英露何れと結ぶべきかについては、彼は寧ろ露國と結ぶべきことを説いてゐる。曰く

『然る處亞國其外諸國は交置候も不苦候へ共、英魯は兩雄不並立國故甚以我兼申候。其意は既にハルレス口上にも歴然、其上近來争鬭の迹にて明白に御座候。依之、後日英より魯を伐先手を頼候歟、又は蝦夷箱館借吳候旨可願候。其時斷然英を斷候歟、又は從候歟、定策可有之事。小拙は是非魯に從ひ度奉存候。其譯は魯は信あり隣境なり、且魯と我とは唇齒の國、我魯に從候は魯我を德とすべく候。左すれば英怒り可伐我。此我願なり、我孤立にて西洋同盟の諸國に敵對は難致、魯の後援有れば假令敗るゝも皆敵に不至は了然に候。然れば此一戰我弱を強に轉じ、危を安に變候大機關に御座候て此より日本も眞の強國と可相成候。其上戦争迄には、是非魯國並亞國より人を倩ひて、我國の大改革始、水軍陸戰共精勵可爲致と奉存候』

次にアメリカとの關係については

『舊右様魯の親昵を得候には、所謂難報之恩無之しては不相濟候。魯國へ我より使節を以て和親を乞候積、其段には種々心算有之候得共筆にては難述候。舊魯に國を託し候迄には、

橋本左内の經濟思想

外より擾亂被致候ては不相成候故、其迄は亞墨利加を頼付、英夷の跋扈強梁等は成丈拒貫候事。此亦色々の工夫も御座候へ共、何も應答言辭の間になくしては口には難述奉存候事。

依之交易マニストル指置の二個條相許、其中交易は矢張官府交易に致度候間、勝手交易は相斷申度候事。阿片並借地之事は斷り、港は堺・神奈川・箱館・長崎之四個所位に極置度事、何分並を一個之東藩と見、西洋を我所屬と思ひ、魯を兄弟唇齒となし、近國を掠略する事緊要第一と奉存候』

と説いてゐる。而してかくの如き大變革を始むるにつけても、『内地之御處置、此迄之舊套にては不相濟』とし第一、繼嗣問題、第二には

『我公・水老公・薩侯位を國內事務宰相の專權にして、肥前公（松平肥前守齋正鍋島）を外國事務宰相の專權にし、夫に川路（川路左衛門尉・永井（外國奉行）岩瀬（外國奉行岩瀬肥後守忠震）位を指添、其外天下有名達識之士を御情者と申名目にて陪臣處士に不拘撰舉致し、此も右專權之宰相に派別に致し附置、尾張（徳川大納言慶恕）、因州（因州島取城主松平相摸守慶徳）を京師之守護に、其指添に彦根（江州彦根城主井伊掃部頭直弼）、戸田（美濃大垣城主戸田采女正）位、蝦夷へは伊達遠州（伊達宇和島城主伊達遠江守宗城）、土州侯（松平土佐守豐信）位相遣し、其外小名有志の向を舉用候はゞ、今の勢にても随分一芝居出来候はん歟と奉存候。其上魯西亞・

亞墨利加より諸藝術之師範役五十人計僱受、諸國へ學術稽古所相起、物産の道を手廣に始め、内地の乞兒雲介の類に頭を立、相應之賄遣し蝦夷へ遣し、山海之督爲致、往來は重々海路より致し候はゞ、忽開關可相成、航海術も直に可熟奉存候。云々

露國に通商を許すべしとする説は早くより存した所であり、親露排英の策論も屢あらはれた所であつたが嘉永以降に至り露國を與國として英米其他の諸國を防ぐべしとする説が行はれ、幕府當路者のうちにも同様の意見を有せしものもあつた。井野邊茂雄氏はこの種の論者として大槻磐溪・安井息軒を挙げ、幕府當路者として海防懸の江川英龍、海防懸の勘定奉行及勘定吟味役、長崎奉行手附大井三郎助、馬場五郎左衛門、白石藤三郎等、海防懸の筒井政憲、川路聖謨、閣老阿部正弘等を擧げてゐる。左内の説は明確な排英親露説であり、米國とも友好關係を保ち、且、内政上にも大改革を施さんとするものであることは、上述の所によつて明かであらう。

(二) 生産貿易論

安政二、三年頃の「外國貿易説」¹⁰⁾

に曰く

「一、制産の一途、從來治國富民之要務に御座候處、近來貿易

相開候に付ては、彌増御大切な義と奉存候

一、於御國表、農工手業操作之筋、次第に御世話も被爲在候

上は、産物之員數年々夥しく増進可仕候

一、右を程能く賣捌候事肝要之義に奉存候

一、當今之勢にては、右諸品物を以て外國と取引相始候事、

誠に國家に於て大なる御利益可有之奉存候

一、右に付長崎・箱館等へ商館之御設け御座候事と奉存候

一、外國民は商律を守り信義を基と致し候故、本朝の商とは

心術不同候

一、外國民と引合候上は、品物之交易のみならず、智慧の交

易肝要に御座候、即製作使用之器械、經濟實用之談論を

も交易致し度奉存候

一、方今の形勢は、五大洲之模様を先知仕候者、大利を獲可

申候

一、彼之情を得、彼之長を習ひ、之を御國內に推廣め候はゞ

其利制産のみならずと奉存候

一、貿易引合之間に逐々懇切之談に及び、舍密・測量・航海

等諸學科之事をも穿鑿仕度候

安政四年五月の「制産に關する建議」¹¹⁾にもこの趣旨

は明瞭にされてゐる。即ち「制産之儀は是迄とても治

9) 幕末史の研究、455—495頁。

10) 幕全集、3—4頁。

11) 幕全集、24頁。

國富民之要務に御座候得共、當今外國貿易盛に相開候折柄に於ては、國家御大政中の最も御事務と相成候事と奉存候』とし、御國表において農業・手工業等を奨勵し、吳服物・漆器・紙並に其他種々の器械等國產製造のことに努めてゐるから、今後産額は増加することゝ考へられるが『外國を相手に取り組候て仕出候はゞ永久莫大之御利益にも可相成奉存候。』且つ『彼方より持渡候品物の中には本朝にて製し候よりは過分下料に相成候向も數々可有之、此等の品若し愈其有用を見極候時には、直質に致し、其外本朝に未だ開けざる事等綿密に承合、相互に經濟之筋をも相談仕候はゞ別して利益も可多奉存候』と論じてゐる。

更に安政六年二月左内より、村田巳三郎へ宛てたる書狀¹²⁾には生産擴充に關し、漆器と紙とは『一切上より元入被成候處迄、從來相運候様致度、尤此邊に就ては滿天下の姦商種々心計致居候勢も有之、既に當秋御國へ紙質込に罷越候心算のものも有之由承候位に御座候間、何分公平の位にて窮民のたすかり候様手段相立、

官へ全權御握被成候事專一かと奉存候』といへるが如きは藩營專賣仕法を示唆せるものと考へられる。

要するに以上の所論は農工生産の擴充をはかり、以て外國貿易の利を占め、或は藩營專賣仕法を採用すべきことを説けるものと見る事が出来る。

(水) 農政論

農政に關しては、安政四年閏五月の

「農政建議原案」¹³⁾がある。先づ當時の農村事情を説明せるものを見るに、曰く『耕作之儀は惰と勤とに有て生穀増減あること夥し。(中略) 尤其村柄、土地の肥饒、廣狹、損徳等しからず、其上人情勞を厭ひ佚を喜ぶ風俗故、自然と遊惰花奢押移る有様であるが、更に各階級の百姓について見るに、中分以上の百姓の次男の者などは、

『他家相續心配致すよりは、十五石亦是十石斗高分けし、別家と唱へ、建家の頗有之、復往來筋は半商ひ等願出、是又癡疾の者建家等願出候事に御座候』

次に小百姓は

『請作等にて田なければ衣食に足らず、夫に稼を重とし、本郷村は居屋敷に年貢あり、面當りの人足あり。御城下にては

12) 全集、652頁。
13) 全集、37—40頁。

租税を出す事なく、日雇をすれば暮し安し。佚を好む人情にて、農を止め町方へ引越し、亦は不頼の輩町方に徘徊し、町人は常に袴を着し其邸所へも高足を羨み、百姓は糞土をこなし、晝夜の骨折、軍國の節は人夫に遣はれ候得ば、安を益むより自然と御徳を背き候者も可有之云々

然るに富める百姓は

『富者は持分の高少くして其土地の取實は多く、賦役は輕く貧者は持高多く取實は少なく、賦役は重し。富者は膏腹の地斗にて兼併して鹽田同様の持高あり。』

かくて農民のうちにも貧富の懸隔を生じ、農の本業に勵む者なく、農村衰微せざるを得ざるわけである。聖人の法によれば貧富の懸隔はなきことであるが、さればとて『井田の正法は不容易義』であるから、田畝の不同不公平を均らすために『均田』の仕法を採用すべきである。即ち『一ヶ年に一郡下にて、十ヶ村二十ヶ村づゝにても畦直し爲願、不陸の田畑を平均し、水帳を嚴重にし、一村限り田畑の賣買を免るし、郡所の裏印を申附度事。』尤村により長短反別直段の高下等種々の事情があるから、三年にて成ることあり、五年十

年にて成ることもあれば、人別の多寡を論ぜず、田畑の不同を等しくすることを專一とし、更に儉勤勸農に努めたいと論じ、百姓へ資金を融通するも、田畑不同を直さずしては効果なきことを説き、更に均田の手續畦直しの法について詳述してゐる。

要するにこの論は農民の貧富懸隔を是正せんがために均田の法を採用すべきことを詳論したものである。

四 餘 論

左内が蘭學を修めたことは、既に述べた如くであるが、蘭學を通じて當時の西洋事情を知り、之れがために開國進取の思想を懷くに至つたものは當時少くはなかつた。左内も亦安政六年正月十五日中午根雪江への書翰のうちに『蘭書にて大分新得御座候。航海書にて帆船纜碇等の運用、其他停泊之規則等迄書載候極新之著述も有之候。三間幽囚之身も、萬里の雲天を飄駛する心地仕候。其他測量書の簡而明者有之、他年之渴望頃に慰候心地、快々に堪不申候』とあるが如き、その

進歩的なる思想のよつて、來る處を知るに足るであらう。

次に左内は前述の如く制産論を説いてゐるが、その内容より見て制産の文字は水戸學に所謂制産論と同じからず、單なる生産論に過ぎぬ。場合によつては製産の文字も用ゐられてゐるが、¹⁵⁾これも同様生産の意味である。水戸學に於て制産論と稱するは、私有財産の制限、就中田産を平均して貧富の懸隔なからしめんことを主張せるものである。その著例は岡井蓮亭の「制産論」¹⁶⁾の如きこれである。勿論前述の如く左内も貧富懸隔是正の一方法としての均田を説いてゐるが、それは制産論として説いたものではない。

更に左内が安政四年八月藩主松平慶永の侍讀として樞機に參したことは既に述べた所であり、慶永の意見として傳へられてゐるものの中には、左内の建議により又はその草案によつて成れるものが少くない。慶永は最初鎖國攘夷の説を採つたが、左内の説にきき¹⁷⁾その説を改めて開國貿易を唱へたものとされてゐる。この

點については安政五年以來横井小楠が慶永の帷幄に在つて畫策するところ多く、慶永が彼の説に聽く所多かりしことも併せ考ふべきであらう。小楠は明治二年六十一歳のとき難に仆れたが、左内は僅に二十六歳にして安政六年に世を去つた。若し左内にして維新のときに及び、永く獻策する所があつたならば、政治經濟上の功績のみならず、その思想にも一層見るべきものがあつたであらう。さきに小楠の經濟思想を略説した私は、¹⁸⁾茲に左内の思想の一端を説く機會を得たことを喜ぶと共に、彼此一脈相關聯する所のものあるを思はざるを得ない。

15) 全集、652頁。

16) 日本經濟大典、第四八卷所收。兩谷菊夫稿、水戸學と社會政策「制産論」の研究(兩谷毅著、水戸學の新研究所收)。

17) 國史大辭典所掲、橋本左内の項參照。

18) 拙稿、横井小楠の經濟思想、經濟論叢、第四八卷、三號。